コントロールとは何か？

1964 年 6 月、パリフロイト学派設立の「＜行為＞」のなかで、ラカンは以下の定式を出します。「コントロールは不可欠である」。コントロールは不可欠ですが、しかし義務的ではありません。

コントロールが不可欠なのは、精神分析家にとり、治療において分析主体が得た分析的効果を理解するのは、肝心なことだからです。コントロールが明白なことのように不可欠であるのは、実践家が分析の実践を語るために分析家と会うようせかす、ひとつの欲望に、それが属しているからです。ですからそれは、ひとつの主体的ロジックに対応しています。そこでコントロールに取り組む者は、自由にコントローラーを選び、そのコントローラーに対してひとつの知を貸すことになります。いかなるスタンダードもコントロール面接を命じることはありません。

コントロールと精神分析家の養成

分析家の養成は理論的な知―本質的で、伝達可能で、しかし実践には不十分な知―を、想定しています。不十分、というのは、それが症状の類型論に基づくからです。ところでそれぞれの症例は理論を問いに付し、特異性というものに関心を寄せることが想定されます。精神分析を方向づけるということ、それは、理論的規範と症例の特殊性との不一致を前にして、後ずさりすること、ではありません。それは、臨床上で出会う困難に立ち向かうことを受容することでもあります。それは、ひとりで、しっかりとした養成もなく、第三者抜きの状態で、立ち向かうものではありません。

コントロールは、大学の型をした知を伝達することの彼方へときちんと進む、ひとつの養成に貢献するものです。確かに、分析主体の言うことをよりよく解読するために、診断するために、そして治療の方向を統御するために、分析家は他者が持つと想定される知に助けを求めることがあります。ひとつのセッションやひとつのフレーズの細部を報告したり、治療の展開をふりかえったり、解釈につながる謎の点を問うこととか。コントローラーはそれらの宛先人となります。そしてコントローラーの介入により、ときおり驚きと発見という効果が生まれます。ひとつの語、ひとつの問いかけによって、見方が反転したり、べつの読解、べつの解決を解き放ったりすることがあります。ときおりは、自分が報告して言うことを、自分の耳で聞くことによって、コントロール主体の側から驚きが生じることもあります。

自らの行為を理解すること

ラカンが考えるコントロールとは、まったく分析的なものであり、したがってコントロール主体の治療への反響として考えられるものです。第三者に向き合うことは、想像的な双数性とその効果から、分析経験を脱出させるものです。じっさい、ラカンは、まなざしの捕捉力と耳と競合的なその支配に対し、用心するよう私たちに呼びかけています。べつの言い方をするなら、コントロール主体は自らに固有の享楽の、潜在的残滓からは距離を保ち、そうすることで自分自身が行う治療から教育的な結果を引きだすことができるのです。それに加えて、患者のなかの分析的効果を読み取りながら、分析家は自身のポ

ジションを解明するのです。

しかしながら、コントローラーは、ソクラテス的なモードでそれを理解するなら話はべつですが、ひとりの師＝主人ではありません。コントローラーは実践家が自らの行為が理解できるように励まし、事後においてのみ、患者が得られた効果においてのみ、読まれるそのロジックを復元することを奨励します。ところで自らの行為のロジックを錬成し、行為の諸リスクを引き受けること、それは自らをそれに対して責任を負う者とすると同時に、精神分析との特異的な関係を、自分自身のスタイルと同定することです。

知らないことを知ること

ジャック＝アラン・ミレールは、＜分析家＞（大文字の分析家）の概念は存在しないこと、それゆえそれに適合するように実践家を誘うことはできないことを、私たちに思い出させています。「唯一の開かれた道は、パラディグム（範例）の道としてとどまっています。超絶的な知（super-savoir）について喪の作業をすること、知らないことを知ること。分析家としての特異性を引き受けること１」。コントロールはそれに貢献します。なぜならそれぞれの症例の新しさを理解させるからであり、すでに確立されている知に基づくような、あらゆる偏見を無視するように誘うからです。

原注１　《 En ligne avec Jacques-Alain Miller 》, La Cause du désir, n° 80, février 2012, p. 9, consultable en ligne sur Cairn.info.